

採 掘 餘 録（其六）

久 内 清 孝

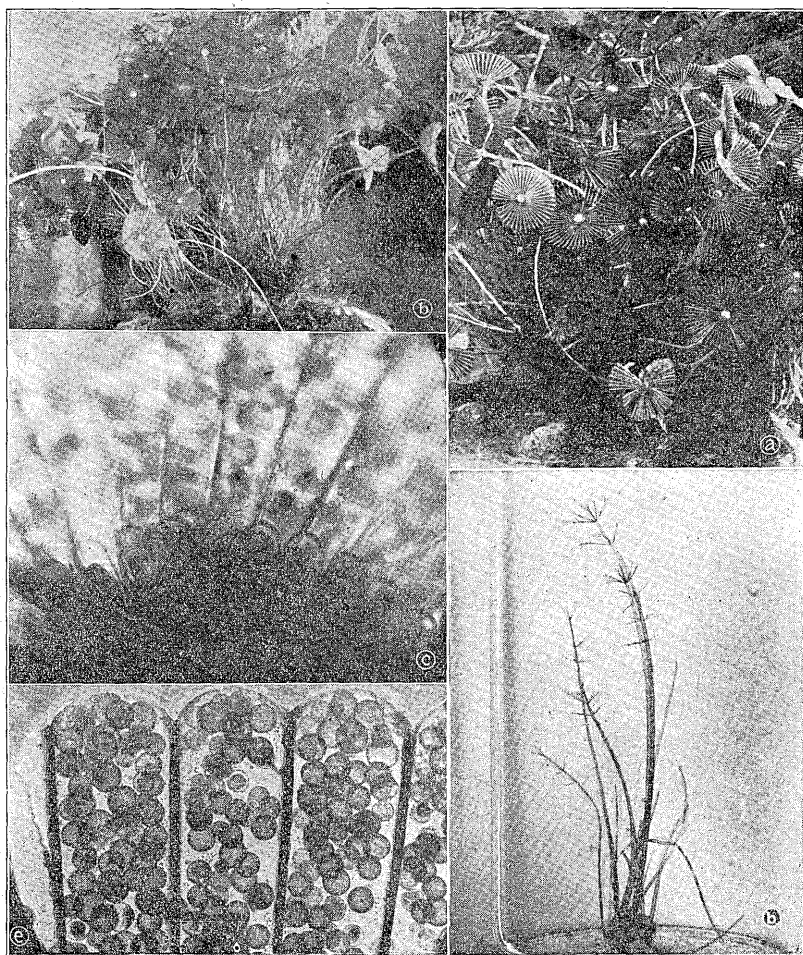
K. HISAUTI: Botanical Notes (VI)

○かさのりヲ培養シテ見ター例ヲ報告シテオク。

昨年2月末琉球那覇産ノかさのりヲ飛行便ニテ東京ニ取寄セ、豫メ用意シ置キタル海水（數ヶ月前東京、大森、森ヶ崎海岸ニテ汲上ゲ約1ヶ月間靜置シタルモノヲ濾過紙ニテ數回ニ亙リ濾過シタルモノニテ、 $\text{pH}=7.97$ ）ヲ用ヒ、深サ直徑共ニ20 cmノ普通硝子ニテ製シタル容器ニテ培養シタ。琉球ヨリ到着シタルモノハ、7 cm \times 4 cm 厚サ1 cmノ石灰質ノ岩片デ、約40個ノ傘ヲ有シ、其柄部ハ石灰質ヲ包裹シテ居タ。之ヲ洗汰シテ、基物ニ附着セル異物ノ排除ニツトメタル後、前記硝子器中デ培養シタ。3月中旬ニ至リ傘ニ白斑ヲ認ムルニ至リ、且基物ヨリ幼植物ノ多數ニ發生スルヲ見タ。白斑ヲ呈セル傘ノ各室（囊枝）中ニハ、多數ノ球狀ノ包裹（Cyst）ヲ認メタ。包裹ハ少數ノ橢圓狀ノモノモ出來タガ、大多數ハ球形デアツタ。此ノ點地中海産ノモノトハ甚シク相違スル。其大サハ區々デアツテ20, 40, 70, 120, 140, 210, 240 μ 等ヲ測定シ得タガ、120-140 μ 程度ノモノガ最多數デアツタ。果シテ自然ノ環境ニアルモノハドナナ状態デアラウ歟。傘ハ夏季ニ落下シタガ、落下セルモノハ9月末ニ迄ビテ漸ク頽壞シ始メタガ、本年春迄傘ノ一部ガ其マ、ノモノモアツタ。包裹ハ水中ニ游離沈潜シ、其マ、越冬シ5月ニ至ルモ尙生存シタ（此間何等刺戟ヲ與ヘズ）。

前記基物ヨリ發生セルモノハ、3回2又セル5個ノ枝、各節ニ輪生シ、其節數ハ一定ノ節間ヲ隔テ、5層内外ヲ普通トス。然シテ本年5月ニ至リ其莖頂部ニ傘ノ發生ヲ見ルニ至ツタ。水中ニ游離セル包裹ノ將來ニ就テハ、余ハ豫斷ヲ下スヲ躊躇スルモ既ニ歐洲産ノモノ2種ニツキ、Prosistenkunde 92 Band Heft 2 (1939) p. 178-225ニ立派ニ其生系交迭史ガ決定的ニ報告サレテ居ルノデ、日本ノモノモ之ト同一ナルベキヲ以テ、茲ニ余ノ培養1ケ年ノ概況ヲ述ベテ、コノ相違ヒノ仕事ヲ打切ルツモリデアル。況ンヤ、聞知シタ處ニヨレバ、既ニ本邦ニ於テモ數世代ニ亙リ、之ヲ觀察シツ、アル仁ノアルニ於テオヤデアル。

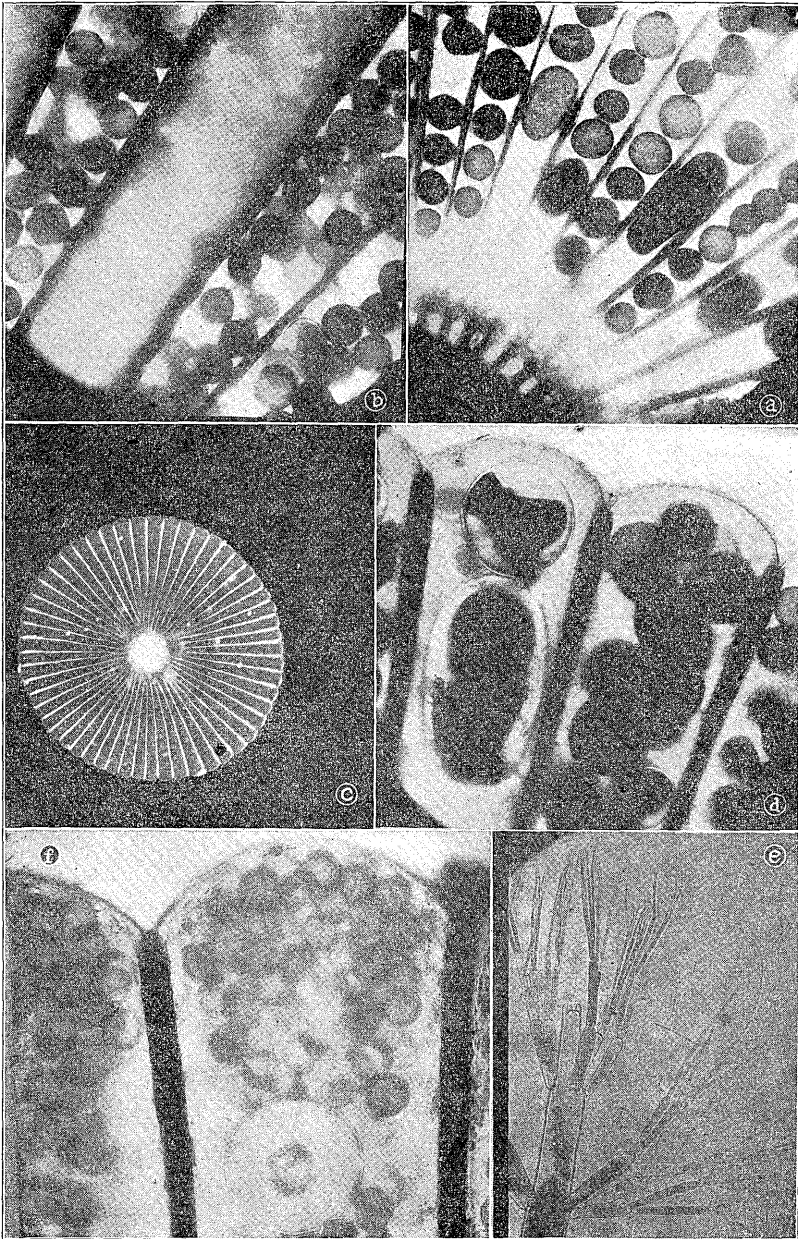
又別ニ琉球ヨリ携帯シ來レルモノガアル。之ハ傘部褪色シテ枯死セルモノ、如キ觀ヲ呈セルヲ以テ、其部ヲ除去シタル後、前記水中ニ放置シ置イタ所、是亦多數ノ幼植物ノ發生ヲ見タルモ、夏期日光ノ直射ニ逢ヒ水溫上騰（45°C）シ、殆



第 1 圖 (a) 琉球ヨリ到着セル當時ノモノ、約 3/4 (左上ノb) 其後幼植物 (右方) ヲ發生セル狀、約 1/2 (c) 傘ヲ裏面ヨリ見テ下冠ヲ示ス、約 $\times 25$ (右下ノb) 幼植物、約 1/2 (e) 囊枝中ニ包囊即 Cyst ノ存在ヲ示ス、約 $\times 25$

ンド壊死シタ。然ルニ其後ニ至リ基物ヨリ再び幼植物ヲ發生シ、ソレガ完全ニ成育シテ本年5月ニ至リ傘ヲ發生スルニ至ツタ。

以上、何レモ水ノ靜謐ナル容器中ニ培養セル爲カ、柄部甚ダ延長シ、15 cm ニモ達シテ居ル。J. HAMMERLING 氏ガ Biologischen Zentralblatt (51 Bd. Heft 11. 1931) デ、地中海産ノモノニツキ報ズル所ニヨルト (勿論之ハ Gamete ヨ



第 2 圖 (a) Cyst ノ發生初期. 約 $\times 30$ (b) 同上、但シ囊枝ニヨリ Cyst 發生ニ前後アルヲ示ス. 約 $\times 30$ (c) 上面ヨリ見タル傘デ氣泡ハ同化作用ノ爲發生セルモノ. 約 $\times 3$ (d) 異形 Cyst ノ發生セル場合. 約 $\times 35$ (e) 第 1 圖 (右下ノ b) ラ擴大セルモノ. 約 $\times 5$ (f) 異形 Cyst ノ他ノ 1 例. 約 $\times 30$

リ發生シタモノデノ事ナルモ)、柄部ニ石灰質ヲ包裹セザル由ナルモ、余ノ上述セルモノ、場合ニハ、全ク石灰質ヲ蓄積スルヲ見タ。敘上ノ事實ニヨリ見ルトキハ、本種ノ岩片ニ附著スル部分ハ、一年生ノモノニ非ズ、且甚ダ生存力ノ強キモノ、如ク考ヘラル。

か さ の り 年 表

I *Acetabularia mediterranea* ヲ用ヒタル時代

1893 (明治 26 年) 岡村金太郎氏植物學雜誌 XIII 卷ニ動物學者ノ波江元吉氏が、琉球デ採集セルモノヲ、松田定久氏が所藏セルコトヲ記ス。

1894 (同 27 年) 伊藤篤太郎氏琉球ニ採集セラレシモノ、如キモ標本ノ所在不明。

1895 (同 28 年) 11 月名越正助氏薩摩ノ喜入ニテ採集サレタルモノ、東京科學博物館所藏伊藤篤太郎氏寄贈品中ニアリ。甚ダ小形ノモノニテ、當時既ニ疑問トサレシモノ、如ク、前記標本ト共ニ明治 32 年 12 月 16 日ノ札幌局ノ消印アル伊藤篤太郎氏宛宮部金吾氏ノ端書ガアル。ソレニ依レバ宮部金吾氏ガ此ノ標本ヲ伊藤氏ヨリ借用シ其返事トシテ意見ヲ述ベラレタモノデ其當時ニ於テハ單ニ小型ナル一型トシテ扱ハレタルモノ、如シ。上記松村氏採集品ト共ニ貴重ナル資料ナリト云フヲ得ベシ。

1897 (同 30 年) 松村任三氏採集ス。同氏が *Insula Uchina*¹⁾ (沖縄) ニ採集サレタル標本ガ伊藤氏カラ科學博物館ニ寄贈サレタモノ、内ニ現存ス。東大ニハ松村氏ノ採品ヲ藏セザル様ナリ。

1899 (同 32 年) 伊藤氏 *Hedwigia* XXXVIII P. 184 ニ報告ス。

伊藤氏ノ論旨ハ、本品ガ本邦ニ産スル事ニツキ、文獻上ニ記錄ナキヲ以テ報告スルト述べ、邦産モ歐洲産モ同一種ナリト斷定シ、且伊藤氏ノ採品ガ白色ナルニ比シ、松村氏ノ採品ハ綠色ナルハ、後者が光線ノ不足スル個所ニ生ゼシモノナラント云フ様ナ意味ノコトヲ述ベテ居ル。マタ、Cyst ニ就テハ、其形狀ニ言及シテ居ナイ。若當時 Cyst ヲ見ラレタナラ、既ニ其時代ニ別種トナツテ居タコトデアラウ。

同 (同 年) 黒岩恒氏植物學雜誌 XIII 卷ニ「岡村博士檢定琉球海藻目録」ナル記事ヲ掲ゲ、始メテかさのりノ和名ヲ見ル。蓋シ岡村氏ノ命名ナルベシ。

同 (同 年) 岡村氏日本海藻屬檢索表第 I 版ニ、屬ノ和名トシテかさのり屬ナル名ヲ用フ。

1902 (同 35 年) 岡村氏日本藻類名彙出版サレ、本品ヲ收録セラル。

1904 (同 37 年) 松村任三氏帝國植物名鑑ニ載ス、和名ナシ。

1) *Uchina* 又ハ *Uchina* ハ沖縄ノ琉球音デ其詳細ハ吉田東伍氏大日本地名辭書續篇第二、琉球 p. 4 ニ譲ル。尙友人ノ某琉球人ニ發音シテ貰ツタラ「ウチナー」ト語尾ヲ長ク引クノデアル其點「ソーダナー」ノ「ナー」ニ似テ居ル。

- 1911（同 44 年）齋田功太郎氏内外普通植物誌ニ之ヲ載ス。
 同（同 年）安田篤氏隱花植物各論ニ載ス。但シ歐洲產ノモノニヨルモノ、如シ。
 1913（大正 2 年）三宅驥一、草野俊助兩氏譯ストラスブルガー氏教科書ニハ、歐洲產
 ノモノニかさのりノ名ヲ用フ。
 1925（同 14 年）岡村氏日本藻類名彙第 II 版ニ之ヲ載ス。
 1926（昭和 1 年）池野成一郎氏植物系統學ニかさのりノ名ヲ用フ。
 1930（同 5 年）岡村氏藻類系統學ニ之ヲ記ス。
 1931（同 6 年）山田幸男氏藻類「岩波生物講座」ニ之ヲ收ム。

II *Acetabularia ryukyuensis* ヲ用フル時代

- 1932（同 7 年）岡村氏日本海藻圖譜 VI 卷 No. 7 ニ始メテ新種トシテ記載サレ、*A. ryukyuensis* OKAMURA et YAMADA ノ名稱確立ス。但シ岡村先生モ Cyst ノ形狀ヲ充分ニ記サレナカツタ。
 1934（同 9 年）山田幸男氏琉球ノ海産綠藻ニ之ヲ收ム（北大紀要 S. V. Vol. III No. 2）。
 1935（同 10 年）山田幸男氏分類植物學上卷ニ之ヲ收ム。
 1936（同 11 年）岡村氏日本海藻誌ニ之ヲ收ム。

附記、東京科學博物館ノ標本ニハおとひめがさノ和名ガ用ヒラレテ居ルガ之牧野博士ノ命名ノ由、而シテ其名ガ印刷公表サレタルハ牧野富太郎、根本莞爾共編東京帝室博物館天產課日本植物乾腊標本目錄（大正 3 年=1914）ナリ。而シテコノ名ハ甚ダヨク本植物ヲ表現スル名稱ナルモ若シ和名モーツニ統一スルコトガ適當ナリトセバ恐ラク一般ニ用ヒラル、ニ至ラナイデアラウ。

追記、本稿ヲ校正スル時（12, VII, 1940）ニ於テハ上記同一基物ヨリ發生セルモノ（Cyst カラ出タノデハナイ）即チ余ノ入手後 2 年目ノモノニ發生セル傘ハ順調ナル發育ヲ遂ゲ其最大限ニ達セリ。然シテ傘及ビ柄ノ屈光性ニ就テハ著シキ變化ヲ認メ得ズ。